

宸翰本和泉式部集の書誌的研究

岸 本 理 恵

一、はじめに

宸翰本和泉式部集は、歌数百五十首、勅撰集から引かれたと思われる歌も多いものであるが、『私家集大成』には「和泉式部Ⅲ」として翻刻もされている。^(一)しかし一般に『和泉式部集』^(二)と言えば、以下に論じようとする宸翰本和泉式部集ではなく、『和泉式部正集』と『和泉式部続集』を指す。二つの集を合わせると歌数は千五百首余り、さらに現存本はいずれも江戸期の写本ながら、古筆切等によりもとは定家監督書写本であったことが明らかで、和泉式部の和歌を知る上で一番の資料とされている。宸翰本和泉式部集の諸本はこうした状況を大きく変えるものではないが、その成立は『新古今集』から『新勅撰集』の成立までの間ともされ、江戸以前とされる写本が複数現存する。以下に、こうした諸本を書誌的に比較検討することで、もうい

ちど宸翰本和泉式部集を位置づけてみたい。

二、諸本の分類

宸翰本和泉式部集の諸本については、早く藤岡忠美氏が整理・分類され、その後、吉田幸一氏が諸本の詳細を掲載する形で考察を加えられている。^(三)その分類は、宸翰本和泉式部集を伝後土御門院宸筆本系統（以下に「伝後土御門院系統」と省略する）と伝後醍醐天皇宸筆本系統（以下に「伝後醍醐天皇系統」と省略する）に大別し、実富本を伝後土御門院系統の下に位置付ける、藤岡氏の説に従うもので、現在でも通用するものである。主な諸本を示すと次のようである。

一、伝後土御門院宸筆本系統

① 京都大学図書館蔵 A 本……室町写

〔極札 古筆了任・藤本了因（後土御門院）〕

一九六六年）

複製 『未刊稀覯本叢書第一編 伝後土御門院宸翰本影写異

二、伝後土御門天皇宸筆本系統実富本

本和泉式部歌集』（小川寿一解題・趣味講座出版部・

⑤宮内庁書陵部蔵B本 ……室町写
奥書「右之一冊者右少将実富朝臣以御筆書写校合卒」

一九三三年）、『和泉式部集定家本考 上』（吉田幸一・

⑥天理大学附属図書館蔵本 ……江戸中写
奥書「右之一冊者右少将実富朝臣以御筆書写校合卒」

古典文庫・一九九〇年）

翻刻 『和泉式部日記詳解』（小室由三・白帝出版・一九三七年）、

三、伝後醍醐天皇宸筆本系統
⑦陽明文庫蔵本 ……江戸初写
奥書「以為相自筆之本合書写了」

『和泉式部歌集』（清水文雄・岩波文庫・一九五六年）、

『私家集大成第二卷 中古Ⅱ』和泉式部Ⅲ（明治書院・

一九七五年）

②京都大学図書館蔵B本 ……江戸初写

③宮内庁書陵部蔵A本 ……江戸初写

外題 靈元天皇筆

外題 「後醍醐帝宸筆本 兼澄集 同 和泉式部集」
内題 「後醍醐天皇宸筆 和泉式部集 辛酉初秋 源常典謹

翻刻 『桂宮本叢書私家集九』（伊地知鐵男・橋本不美男・

写）※辛酉は文久元年（一八六一）

一九五四年）

④吉田幸一氏旧蔵慶長十年書写本 ……慶長十年写

奥書 「慶長十年六月廿六日書之」

一 九〇二年）、『研究と資料 第二輯』（武井和人・野
村精一・一九七九年）、『新潮古典集成 和泉式部日記

複製 『和泉式部全集 資料編』（吉田幸一・古典文庫・

和泉式部集』（野村精一・新潮社・一九八一年）

一九六六年）、『和泉式部集定家本考 上』（吉田幸一・

伝後土御門院系統と伝後醍醐天皇系統の大きな違いは、第一に
歌数が異なる点にある。その違いは二箇所あり、一つは、59番

古典文庫・一九九〇年）

翻刻 『和泉式部全集 本文編』（吉田幸一・古典文庫・

から63番にかけての部分である。伝後土御門院系統では、^(四)

かりの子を人のおこせたるに

いくつつ、いくつかさねてたのま、しかりのこの世の人の
こゝろは (59)

人の夜ふけてきたりけるをき、つけて、ねたるかする
ことなといひたるに

ふしにけりさしもおもはてふ糸竹の音をせせましよふけた
りとも (60)

ひさしうおとつれぬ人の、ひんなかるましうはまいら
んと申たれば

もしもこはみちのまそなきやとはみなあさちかはらと成は
てにけり (61)

こゝろあしきころ、人に
あらざらんこのよの外のおもひ出にいま一たひのあふ事もか
な (62)

ものへゆくとして人に
いつかたへ行とはかりはつけてましとふへき人のある身と
思は、 (63)

とある。これに対し、伝後醍醐天皇系統では、
かりの子を人のをこせたるに

いつかたへゆくとはかりはつけてましとふへき人のある身

とおもは、

とあり、伝後醍醐天皇系統の59番歌から63番詞書がない。59番
詞書にある「かりの子」は、59番歌とはよくつながるが63番歌
に続くものでない。『和泉式部正集』七〇六番でも伝後土御門
院本と同じく、次のように載る。

かりのこを人のをこせたるに

いくつつ、いくつかさねてたのま、しかりのこのよの人のこゝろを
また宸翰本和泉式部集63番歌は、『和泉式部正集』七四六番に、

ものへいくとして人に

いつかたへゆくとはかりはいひてましとふへき人のありと
おもは、

とあり、この歌は『後拾遺集』でも、雑二・九二四番に、
ものへまかるとて、人の許にいひおき侍りける

いつかたへゆくとはかりはつけてましとふへき人のある身
とおもはば

とある。やはり、宸翰本和泉式部集59番詞書と63番歌はつな
がるものではなく、伝後醍醐天皇系統の脱落であると考えられる。

もう一箇所は、伝後醍醐天皇系統が巻末150番歌の後に、次の
歌を持つことである。

しもふれとさかへこそませきみか世にあふさかやまのせき

のすきもり

この歌は『千載集』賀部・六三九番に、詞書「たかくらの院の御時、仁安三年大嘗会悠紀方の御屏風歌 宮内卿永範」として入集するもので、和泉式部の和歌ではない。藤原永範は康和四年（一一〇二）に生まれ治承四年（一一八〇）に没しており、和泉式部と交渉があったとも考えられない人物で、仁安三年（一一六八）の大嘗会は、和泉式部と直接的な関係はない。この歌の有無については後で詳しく述べるが、いずれにせよ和泉式部の家集としてまとめられた宸翰本和泉式部集には本来あるはずでない和歌である。

その他、歌数には関わらないが、詞書の有無の差が二箇所ある。15番歌は「君かへむ千代のはしめのなか月のけふ九日のきくをこそつめ」という九月九日の和歌で、伝後土御門院系統には詞書がなく、伝後醍醐天皇系統には「きくを」と詞書がある。一方、138番歌「つれ／＼とふるは涙のあめなるを春のものとや人の見るらん」には、伝後土御門院系統には「物おもひ侍しろ」との詞書があるが、伝後醍醐天皇系統には詞書がない。

以上の異同のうち、特に59番歌から63番詞書については、伝後醍醐天皇系統の誤脱または切り取り等による脱落であり、これにより伝後醍醐天皇系統は歌の数の面で伝後土御門院系統に

劣つていると言わざるを得ない。また、伝後醍醐天皇系統の伝本は、現存するものは二本のみと少なく、書写年次は、後醍醐天皇筆本の転写本であるとする無窮会図書館蔵本は文久元年（一一八六）書写で諸伝本中最も新しく、もう一本の陽明文庫蔵本は、為相筆本の転写本とするが書写は慶長を少し降る頃のものと考えられる。^(五)後土御門院の書写によると極められる京都大学図書館蔵A本は、実際に後土御門院の書写によるかどうかは別としても、その頃の書写ではあるようで、歌数の多さにこの書写の古さも合わせて、一般に京都大学図書館蔵A本をもって宸翰本和泉式部集を代表することが多い。

三、伝後醍醐天皇系統の二本

陽明文庫蔵本と無窮会図書館蔵本は、藤岡氏が諸本を分類された当初から確認されており、伝後醍醐天皇系統に分類されているものである。しかし、その本文の詳細についての言及は、二本間の異同十例を取り上げて論じられた吉田氏の御論があるばかりである。この二本の特徴を以下にもう少し詳しく見ておきたい。

陽明文庫蔵本は、奥に「以為相自筆之本令書写了」と記すが、

本文の筆跡はそのような面影を残すものではない。本文の所々に見られる書入れは、他本との校合によるものではなく、本文末に「一校了」とあるように、書写後もう一度見直して訂正を加えたり、誤読される恐れのある箇所を書き直したりしたものであるらしい。本文は一首一行書きであるが、90番歌は、

すみなれし人かけもせぬ我やとにあり

と、第四句の途中以下を欠く。これは、もと一首二行書きであった歌の二行目を落とした結果であろう。なお、同系統の無窮会図書館蔵本では、

すみなれしひとかけもせぬ我やとにありあけの月のいくよともなく

と第五句まで本文がある。

次に、無窮会図書館蔵本は、『兼澄集』と台綴されるもので、外題は、

後醍醐帝宸筆本 兼澄集

同 和泉式部集

と直書き、一丁裏から『兼澄集』を書写した後、続いて『和泉式部集』の冒頭にあたる三十二丁表には、

後醍醐天皇宸筆 和泉式部集 辛酉初秋 源常典謹写

と記し、次の丁から本文を書写している。和歌は一首二行書き。

縦辺が二六・二cmであるのに対し字高は一四・〇cmに留め余白を大きく残す、一見不自然な書写であるが、これは枳形本であった親本の姿をそのまま写そうという意図によるものであるらしい。伝後醍醐天皇系統のみが卷末にもつ「しもふれど」の和歌は、無窮会図書館蔵本では、散らし書きでゆったりと書写されている。これも親本の書写をそのままに伝えるものなのである。つまり、この無窮会図書館蔵本は、宸翰本和泉式部集の諸本中で最も書写の新しいものではあるが、親本の様子をよく伝えていられる本でもある。この、枳形でしかも卷末歌を散らし書きにするという書写のあり方は、鎌倉期書写などの比較的古い私家集に見られる形態である。^(六)

さて、陽明文庫蔵本と無窮会図書館蔵本は、先に見た、伝後土御門院系統の本文と比べて、歌の増減や詞書の有無は一致する上、ともに首題を持たず本文は一番歌の詞書「春」から始まり、ともに集付を持たない。また、細かな書入れも多く一致する。幾つか例を挙げると、

いかはかりふかきうみとかなりぬらんちりのみつたに山と
つもれば ^本

いつれをか世になかれとは思らんわする、人とわすらる、
みと ^{へき}

ゆふくれにものおもふ事はまさるやとわれならさらん人に
とは、
 みせはや
 (110)

などである。

また、陽明文庫蔵本の書入れには、「し」を「ら」に改めるものが複数ある。

少将井のあま、おほはしよりいてたるとき、てつかはしける
 (91詞書)

人の身もこひにはかへつなつむしのあしはにもゆとみえぬ
 はかりそ
 (109)

これらは、初め「し」と見て書写したものの、見直した際に「ら」が正しいことに気づき訂正を加えたものであると考えられる。本文の内容からみても「ら」が正しいが、親本には「し」と誤読を招くような「ら」の文字が書かれていたのであろう。そしてこれらの箇所は、無窮会図書館蔵本ではいずれも「し」とも「ら」とも判読し難い文字で書かれる。同様に、38番歌は、陽明文庫蔵本に

なきひと、ならてこひんとありなからあひみさらんといつ
 れまされり

とある第二句目「ならて」は独自異文で、無窮会図書館蔵本をはじめ伝後土御門院系統の諸本も「なして」とある。これも陽

明文庫蔵本の親本が「し」とも「ら」とも判別の難しい文字であったことによるのであろう。

二本を比べると、書写年代は明らかに陽明文庫蔵本が先行するものであるが、無窮会図書館蔵本が親本に比較的忠実に書写していること、またそれぞれの親本が極めて近いものであることがわかる。場合によってはそれぞれの親本は同一のものであるということも考えられるのではないか。少なくとも、二本から類推される親本は、一首二行書きの杵形本で江戸期以前の書写、筆跡は為相か後醍醐天皇かあるいは別人かは判断できないが、おそらく無窮会図書館蔵本にどこか面影を留めているのであろう。そうすると、宸翰本和泉式部集は京都大学図書館A本に代表されることが多いが、伝後醍醐天皇系統も無視できないものということになる。

四、伝後土御門院系統と伝後醍醐天皇系統の相違点

では次に、伝後土御門院系統と伝後醍醐天皇系統の異同について、先に挙げた歌数以外の相違点を見てみよう。

11番歌、両本の相違点に傍線を付けて示すと、伝後土御門院系統では、

人もみなみせもきかせもはきのはなさく夕暮のひくらしの
こゑ

とあるのに対し、伝後醍醐天皇系統は、

人もかなみせもきかせもはきの花さくゆふかけのひくらし
のこゑ

とある。『和泉式部正集』五〇番、『千載集』秋上・二四七番にも見える歌だが、傍線部はいずれも伝後醍醐天皇系統に一致する。さほど大きな異同ではないが、単純な誤写とも言い切れない違いである。

また108番歌、伝後土御門院系統では、

よの中に恋てふ色はなけれどもふかく見るらむ物にそあり
ける

に対し、伝後醍醐天皇系統は、

よのなかにこひてう色はなけれどもふかく身にしむ物にそ
ありける

とある。この歌も、『和泉式部正集』九七番、『後拾遺集』恋四・七九〇番に入集するが、いずれも第四句は「ふかく身にしむ」とあり、やはり伝後醍醐天皇系統に一致する。

他にもこのように伝後土御門院系統と伝後醍醐天皇系統が対立するとき、伝後醍醐天皇系統が『和泉式部正集』や勅撰集に

一致するものがある。これについて、伝後醍醐天皇系統が勅撰集等の資料により後から校訂したとする見方もあるが、必ずしもそう言い切れない部分を持つ。例えば14番歌、伝後土御門院系統では、

秋ふくはいかなる色のかせやらむ身にしむはかり人の恋しき
であるが、伝後醍醐天皇系統では、

あきふくはいかなる色のかせなれはみにしむはかり人の
ひしき

とある。この和歌は『和泉式部正集』一三二番に、

秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむ計あはれなるらん
とあり、『和泉式部正集』八六〇番、『詞花集』秋・一〇七番にもこの形で入集している。宸翰本和泉式部集と本文を比べると、第三句傍線部は伝後醍醐天皇系統の宸翰本和泉式部集のみが『和泉式部正集』や『詞花集』が一致する。しかし、第五句傍線部は宸翰本和泉式部集の諸本いずれも「人の恋しき」であつて『和泉式部正集』や『詞花集』とは対立するのである。単純に勅撰集からの校訂とは言えないものである。また9番歌でも、伝後土御門院系統は、実富本も含めて

さくら色にそめしたもとをぬきかへて山ほと、きすけうそなよりそなくイくなるよりそまつイ
とあり、第五句の部分に他本を校合した書入れがある。伝後醍

醐天皇系統は、

さくら色にそめたもとをぬきかつき山ほとときすけふよ
りそまつ

と書入れはなく第五句の本文も異なる。この歌は『和泉式部正集』二一番で、

桜色にそめし衣をぬきかけて山郭公けふよりそまつ

とあり、『後拾遺集』夏・一六五にも入集するが傍線部は『和泉式部正集』に一致する。第三句は宸翰本和泉式部集の諸本と対立するが第五句は宸翰本和泉式部集のうち後土御門院本系統の諸本とのみ対立するのである。第三句は校訂せず第五句のみを、後醍醐天皇筆本系統が勅撰集等の他資料と校合して本文を改訂したというのは、いささか不自然ではないだろうか。

二系統の本文の対立において、後土御門院本系統の本文が誤写や改編したと思われる箇所もある。伝後土御門院系統では2番歌、

はるの野は雪のみつむと見しかともおひいつるものは若
な、りけり

とあるが、初句「はるの野」は伝後醍醐天皇系統をはじめ、『和泉式部正集』二番歌、『後拾遺集』春上・三五番歌など、現在確認できる他の資料はすべて「春日野」とある。どちらも意味

は通るが、伝後土御門院系統の誤写が想定できる。また、同様に76番では、

今朝はしも思はんひとはとひてましつれなきねやのうゑは
いかにと

と伝後土御門院系統にある第三句の傍線部「つれなき」は、伝後醍醐天皇系統や『和泉式部正集』一九八番、『統詞花集』恋下・六六四番などいずれも「つまなき」とする。詞書に「おとこにわすられてなげきける比、霜のふるあしたに、人のもとに」とあるこの一首のは、第三句の「つま」に「妻」と「軒の」端を掛けた趣向であり、「つれなき」では成り立たない。

一方、伝後醍醐天皇系統の本文に他資料とは異なる独自本文が見られる箇所もある。例えば22番歌は、伝後土御門院系統では、

さひしさにけふりをたにもた、しとて柴おりくふる冬はや
まさと

とあり、『後拾遺集』冬・三九〇番と一致する。ところが伝後醍醐天皇系統では第三句の傍線部「たてむ」となっている。『和泉式部正集』七三番では初句と第四句に見られるが、第三句は「た、しとて」となっており傍線部は伝後土御門院系統に一致する。比較的勅撰集などの他資料に対立する本文をもつ

傾向にある伝後土御門院系統において、この傍線部「た、し」のみを校訂したと見るよりは、伝後醍醐天皇系統の誤写あるいは改変の結果による異同と見るべきであろう。

また94番詞書は、伝後土御門院系統で示すと、

^{源任}みちたうにわすられてのち、程なくあつみちのしんわ

^{敦道歌}うかよふとき、て、つかはしたりし

うつろはてしはししの田のもりを見よかへりもぞするくす

のうら風

伝後醍醐天皇系統では、傍線部「みちたう」と「みちた、」の異同は、波線部「しんわう」を「しんわ、」とするのと同じく、伝後醍醐天皇系統が「う」を「ゝ」に誤読したために生じたもので、もとは「みちたう」であったと考えられる。^(八)しかし、この歌は『和泉式部正集』三六四番の他、『赤染衛門集』『統詞花集』『新古今集』にも載る、和泉式部が夫道貞のもとを去って敦道親王のもとへ行くことを赤染衛門が諫めた歌で、「みちたう」は「みちさた」の誤りである。特に宸翰本和泉式部集は80番までの前半と81番以降の後半で成立が異なり、詞書・歌の語句や、歌の配列の状況から見て後半は勅撰集を資料として編集したものと見られている。この94番歌は後半にあたり、『新古今集』ではこの歌の詞書を、

和泉式部、みちさだにわすられて後、ほどなく敦道親王かよふとききてつかはしける

とするのと比較しても、ほぼ同じ表現であることから『新古今集』からのものであることがうかがえる。やはり「みちたう」や「みちた、」は誤りである。そして同じ誤りを共有する宸翰本和泉式部集の二つの系統が非常に近いものであることも知られるのである。

このように、宸翰本和泉式部集の両系統間にある異同は、誤写に端を発しているものもあり、部分的には本文を整えようとするものもある。しかし、どちらか一方が精選本として大幅に改訂する意図で編まれたものではなく、両本は非常に近い本から分かれた様子を見せている。これをふまえ、先に示した両系統間にある和歌の有無を振り返ると、伝後醍醐天皇系統のみが巻末歌15番のさらに後に持つ「しもふれど」の和歌も、必ずしも伝後醍醐天皇系統が誤って補ったとは限らないのではない。私家集において巻末に和歌を補うことはよく行われることではある。しかし、伝後醍醐天皇系統はこの一首の他には和歌を補ってはいない。また勅撰集との密接な関係を示す81番以降にありながら、「しもふれど」の一首前、伝後土御門院系統では巻末にあたる150番の連歌は出典未詳である。確証はないが、

少なくとも150番歌と続く「しもふれど」の歌は、宸翰本和泉式部集成立後のいずれかの段階で増補されたもので、伝後土御門院系統が集付を書入れる際などに、「しもふれど」歌が和泉式部とまったく関係のない歌であることに気付き削除したという可能性も、十分考えられるところである。

五、宸翰本和泉式部集の本文

以上のように、宸翰本和泉式部集の二つの系統の本文はその異同箇所を取り上げて、いずれが本来的なもの、あるいは古い本文を残すということは言い難い。しかし、両本ともに一致するが『和泉式部正集』等の現存の他資料とは対立する部分もある。こうした部分については、秀歌撰的な抜粋本としてまとめられた宸翰本和泉式部集の成立の経緯を考慮したとしても、宸翰本和泉式部集成立当時にあった和泉式部の和歌本文を伝えていると見ることができないのではないか。

例えば24番歌、

つれくゝとなかめくらせは冬の日も春のいくかにおとらさりけり

は、両系統間にやはり異同はないが、この第五句「おとらさり

けり」は、同じ歌を載せる『和泉式部正集』『和泉式部続集』では「ことならぬかな」とある。先に挙げた14番歌「秋ふくはいかなる色のかせやらむ身にしむはかり人の恋しき」の第五句「人の恋しき」は、両系統間に異同はないが、『和泉式部正集』や『詞花集』では「あはれなるらん」であった。また2番歌も、宸翰本和泉式部集の本文は『和泉式部正集』と対立し『後拾遺集』と一致していた。宸翰本和泉式部集の前半80番までは勅撰集と重なる和歌は多いが、後半ほどには勅撰集と一致せず、先に見たように部分的には勅撰集と対立する本文をもつので、2番歌だけを勅撰集から校訂したと見るのは難しい。しかし一方で、この前半部分は『和泉式部正集』『和泉式部続集』とも対立する本文も持つ。これらは現存『和泉式部正集』や『和泉式部続集』と、少なくとも部分的には同じようなまとめられ方の家集でありながら、異なるある歌を伝えている資料が、宸翰本和泉式部集成立当時には存在していた可能性を示しているのではないか。

宸翰本和泉式部集が現在の形に成立するのは、勅撰集を資料とする後半部分に『新古今集』との密接な関係がみられるのに『新勅撰集』以降の勅撰集とは関係が見られないことから、『新古今集』以降『新勅撰集』以前と言われる。『和泉式部正集』や『和

『和泉式部統集』の古筆切には定家監督書写本ものがあり、その同筆資料にはそれぞれ『新勅撰集』成立直前の安貞二年という年号を記すものが見える。^(九)『和泉式部正集』や『和泉式部統集』の書写が行われていたのと同じ頃、また別の『和泉式部集』が存在したことになる。

久保木寿子氏は宸翰本和泉式部集の資料となった和泉式部歌について、「『和泉式部正集』に」類似した、しかしそれよりもやや歌数の多い歌群を想定し、宸翰本④⑤はそれに依拠したものと見る方が妥当であろう」と結論付けられた。^(十)現在は見ることのできない『和泉式部集』の存在が宸翰本和泉式部集からうかがえるのである。

六、まとめ

宸翰本和泉式部集の二つの系統は、もとは一つのものから発し、いずれかが古い本文を留めるというものではない。しかし、その共通する部分については現在見る他の資料と異なる部分もあり、そうした本文が存在していた可能性を示している。現存本としては書写の新しい伝後醍醐天皇系統ではあるが、二本の近さ、そしてそこから類推される祖本は中世のものであつ

た。その筆者とされる人物について言及しておく、後醍醐天皇の生没年は、正応元年（一二八八）—延元四年（一三三九）。無窮会図書館蔵本に「謹写」とあるのはどのような書写態度をいうのか判然としないが、枳形本の形を示し、筆跡もある程度は特徴を残すらしいことは先に見たとおりである。ただし、無窮会図書館蔵本の筆跡は、後醍醐天皇の真跡を臨模したようなものではない。一方、陽明文庫蔵本の奥書に見える為相は、弘長七年（一二六三）年、為家と阿仏尼の間に生まれ、嘉暦三年（一二三二）に没している。冷泉家の祖として知られ、古筆家は時としてこの時代の筆跡を特に「為相」と鑑定することがある。後醍醐天皇と冷泉為相は、同時代に生きた人物である。そして現存本が後醍醐天皇、為相と伝える根拠はあきらかたなく、古筆家の鑑定によるものでもない。場合によっては、同一のものに対して、後醍醐天皇とも為相とも判断されたとか、そのような伝承があったという、判断や伝承の違いであるのかも知れない。

伝後土御門院系統に属する実富本は、京都大学図書館蔵A本に比べて四箇所十四首の和歌を欠くが、書入れや細かな異同も含めて京都大学図書館蔵A本に一致する部分が多い。実富本のうち、宮内庁書陵部蔵B本は室町末期書写とされるもので、^(十一)奥

書に「右之一冊者右少将実富朝臣以御筆書写校合卒」とあるが、この右少将実富は、伝未詳ながら『公卿補任』で見ると、姉小路実富であるらしい。この人物の右少将在任期間は、正和五年（一二二六）十一月十八日から二十七日、嘉暦元年（一二二六）年十二月二十八日から建武元年（一二三四）四月十三日である。この時期に、後土御門院本系統の本文が存在していたであろう。

つまり、両系統ともに現存本は鎌倉末から南北朝頃にはそれぞれ別系統として存在していたということである。現在では注目されることの少ない宸翰本和泉式部集ではあるが、中世には書写され、読まれたものであったということが言えよう。

(注)

(一) 和歌史研究会編『私家集大成 第二巻 中古Ⅱ』（明治書院・一九八二年）

(二) 藤岡忠美「和泉式部集の成立」、『国語と国文学』二八一五・一九五一年五月初出、『平安和歌史論』桜楓社・一九六六年所収）

(三) 吉田幸一『和泉式部集定家本考 下』（古典文庫・一九九〇年）

(四) 引用の本文は、特に断らない限り、伝後土御門院系統は京都大学図書館蔵A本に、伝後醍醐天皇系統は陽明文庫蔵本による。宸翰本和泉式部集の歌番号は、『私家集大成

第二巻 中古Ⅱ』の「和泉式部Ⅲ」による。これは伝後土御門院系統に従った番号である。その他の集については『新編国歌大観』による。

(五) 陽明文庫長名和修氏の御教示による。

(六) 枳形本の私家集は、例えば、冷泉家時雨亭文庫の所蔵になる多くの鎌倉期写本の私家集に見られる。巻末歌を散らし書きにするのも、冷泉家時雨亭文庫蔵『元輔集』などに見られる。

(七) 吉田幸一『和泉式部集定家本考 下』（古典文庫・一九九〇年）

(八) この詞書と歌を後醍醐天皇本系統の陽明文庫蔵本で示すと、

みちた、にわすらてのち、ほとなくあつみちのしむ
わ、かよふとき、て、つかはしける

うつろはてしはししのたのもりをみよ返しもそするくす

のうらかせ

とあり、傍線部以外にも多少の異同がある。

(九) 拙稿「定家監督書写の和泉式部集」(『国語国文』七六一

七・二〇〇七年七月)

(十) 久保木寿子『和泉式部正集』の形成に関する考察(『早

稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊八・一九八二年三月)。

引用文中の()は稿者が付した。

(十一)『桂宮本叢書私家集九』(伊地知鐵男・橋本不美男・

一九五四年) 解題

(きしもと りえ／本学非常勤講師)